



関ヶ原軍記

初編十七
十八

特
達13
2207
9



特
門八遠13
時2.207
卷9

池清

関ヶ原軍託初編卷之拾七

目録

- 一 神君石田の屋敷と員上り事
- 一 并倭人并加別家謀事
- 一 神君大坂初九に後任の事
- 一 并加別家城守清の事

徳川十五代記 編

春雨文庫 編

敵討 每野權三代記 全部十五冊

近世記聞 編

明治太平記 全

開明 小説 鳥追於松實録 五 大尾

肥長 鹿兒嶋士傳 編

珍説 夜嵐實記 全

此書乃や出軍士卒の日記或は戦地より歸京せし探偵人等の説話子因り西國証討の如末と詳細せる第一の實録なり

近世 櫻田實録 全

直小倉青木實記 全部 近日出来

書物 繪入 貸本所

東京牛込細工町 誠光堂 池田屋清吉謹白

此徳川家の旗本青木太助小倉藩長喜高妓眼ひき春情事寄暴借豫談の悪事主日本の奥方艱難心苦と記し實録の及紙綴りたれ近世の珍書なり



園ヶ原軍記初篇卷之拾七

神長石田三成ふかの屋敷と

石田の事

并倭人あま加別くわべつ衆しゆと倭あまの事

去程きよの

徳川大神とくがわ長ちやう大坂御殿おさかごんに於おけ

秀頼ひでたかの也なり討敵うちかたありて志こころを了しす

うち尚日此祝式なり 所目見
等もお海 所退出の時
いりて作せり秀頼は此
車と以病言或ひは愚昧なり
誓言るんどう終方もあるに
あり是より後て 予家信等
も心許なくなむらん又雲
もそも左のごとくさういひ

ゆりあり今日の家来在り
承知さすらんありんば
家康いづれ来りせしむるに
成晴させんとも有ては
いづれ有て 所退出かけ
井伴 本多 柳原おと見あひ
あんどらこの秀頼を
て安堵仕ゆるところのめんく

此清例^{そらむ}引舟^{ひきふね}武彦^{たけひこ}迄^{いたる}
清抱^{きよかか}者^{もの}有^あて出^いられ^るま^まあ^あ
見^みよ^よと^とて借^か人^{ひと}あり^ん
そ^そあ^あふ^ふら^ら時^{とき}所^{ところ}桐^{きり}手^て西^{にし}海^{うみ}有^あ
く^く秀^{ひで}頼^{のり}を^を奥^{おく}ふ^ふく^く入^いる^ると^と
即^{すなは}時^{とき}く^く清^{きよ}下^{した}博^{はく}め^めん^ん
後^{のち}左^{ひだり}志^し小^こお^おる^るび^び市^{いち}の^のり^り
あ^あや^やう^う子^こ殿^{どの}中^{ちゆう}と^と何^{なに}も^もあ^あく

御^ご退^{たい}お^おあり^り博^{はく}内^{ない}の^の倭^わ人^{ひと}芸^ぎ
造^{ぞう}切^ぎり^りと^とあ^あら^らる^るも^も秀^{ひで}頼^{のり}の^のり^り
所^{ところ}や^やら^らる^るも^も車^{くるま}と^と忍^{しの}ぶ^ぶ有^あ
唯^{ただ}腕^{うで}を^をさ^さす^すり^りて^てお^おる^るの^の実^{じつ}
も^もふ^ふら^らの^の清^{きよ}工^{くわう}丈^{じやう}之^の形^{かたち}
家^{いへ}康^{やす}公^{こう}御^ご瑞^{みづ}鼓^こあり^りて^て
作^{つく}出^ださ^さる^るの^の秀^{ひで}康^{やす}の^のり^り武^ぶ千^{せん}余^よ
人^{ひと}之^の依^よ見^み博^{はく}の^の 予^よあ^あら^らる^ると

野崎 忠之 邦身 之 人

その外に 徳士 徳年 之 跡 之 人

大坂 ありて 欠 来り 中 之 人

ありと 俄の 清下 知 あり 志 之 人

事 急 来り 之 人 之 人

一 跡 之 人 之 人 之 人

大 跡 之 人 之 人 之 人

大 跡 之 人 之 人 之 人

習 邦 之 徳 大 名 跡 之 人

す 邦 之 徳 大 名 跡 之 人

此 入 相 之 人 之 人 之 人

時 内 府 公 之 人 之 人 之 人

み 邦 之 徳 大 名 跡 之 人

小 会 邦 之 徳 大 名 跡 之 人

邦 入 之 人 之 人 之 人

今 邦 之 徳 大 名 跡 之 人

を小幡ぬらん別して入用等々

を或大屋敷替々々々々

家康借用りつゝ々々々

作入まらねるに主人を何とも

迷惑あぐる者といふ事も

らば何しこまりきりゆとの返答

申伏見より来りしめん

を〜〜と入り来るもの

〜〜〜多分にあり

徳及具一雨も所存の事

むりつとも武多言糧お目ごら

三叔が用させ〜のなる

ら〜所〜さ〜おき

や〜〜合身堂之物が〜

隼人正あ〜び〜茶中たの

を〜〜〜く〜

これ等々
神君の御流畧ありき
いんとなれを石田二成事
形の大屋一と接く其成
と依和山一有那が此屋敷と
逆徳舎新として徳中この
屋一より出る事と知りぬ
あり候く形のごとく

ふとあひたり二成依和山
よ有く此事とまき一
旬りけり形
肉府公まその翌日殿中此徳
士あまび千徳役人
何入色らんらわ太閤内他界日後
天下の替くも安く
よ前田利永死去有り候

て石田三成執居の候に身成法
ふりつりしりて

赤康を親候ししてたゞく

秀頼を補佐せ給はるに去ぬる

九日 赤康宅にせし

殿中へし書討の沙汰大座立方

成討人とすまこられり成宿意よ

らるや又け 赤康より

あんののこまあるやこれ

秀頼をこれよりありけ候て

子卯を色もるやのり

の為申村式部少輔 徳永

法市は友人をいひ

作入をらんらるとりあり

浮田増田 長束等法 返書成

りしりらるや我らに書て

なせざる後ありと神文を以て
りしに唯々たるありき
前田利長隠謀の企て有る
在玉のうへに其用を
して俄に謀畧を成し討人を
大野 右方よりともき人
利長が堤をたづねわすむ
ゆいてうらひもあはるる

いとて量く徳を以て世に
さんと流るのせり
家康公も和別れの送意真実とい
ふに長きほどに害討の友人
わらうがひなきものあれば右方
勅を請ふ純別へ大野修理亮の
野呂一統刑 作舟を波風も
形く志のありたりその根えり

石田が謀畧手あり又増田去来
此支人々
永康公へ内言
を中よく探切手は足あつと
しども内んを石田と合辨し
く事とさうり今加判の謀
逆の始りとも無あらずあはれ
又車切の増田去来此支人
加判へ内言とありける中

此城の体結の却破換せし
うけし毎日る國持の旧役目平の
子くは雪情有て終るべし
永康公の名しるる
うら
此評判を御父利家今平の
布りし向ふ探との後多平亮
秀頼の法しあ軍しるる

伊東中比徳士役替お内包を
まゝに取られよと

内府公少毛左の所々あり入
ありと謀云と震つてけしび
寄討の妙法もつて利長を
知りぬる事ありとれを
その指えを石田よりその
よ力の逆心比調略手能る振衣

の内 内府公を以てん

以指子あり却

嘉康公を伏見に御陣あり

屋敷との時、行相市正を大

ふ能あつて鬼角

内府公大坂城難れよむひて

浮流すありあり是難とも

在大坂城へよあり古村家

の修めひしし幼丸御殿下介
経ひく秀頼白旗補佐し之
くしと違くこの子をとるげま
中よる子御あるなりその
領を
泉康公大坂下
御殿ある時とて下重く製
秀頼の援えともぬりし御ひ
具中よる幼丸御殿ある時を

これむと人質れらる
て天下安泰ぬるべしとの所
相が工吏まのりし思ろし
市正なり

の事
并加州泉城善清の事

曰く 徳川源君大坂御在に
御務任諸候平伏是は仍て
由威克ましくこの節を下れ
雜沓頻りして和親の利長
逆人の企てをありとす
神君の布せり明年和親へ
以出陣あつて追討する
との御事なりとす

とて横山山城を侵席得たり
吾身名とりつての之を和親
とぬり 秀忠公あり
姫君和親は御入誓の時石田三成
佐和山の城を請ひのるる合
戦の用を志をりあり本多
中務左輔忠勝檢使とす
佐和山は切りよつて三成謀略

を成^ま流^り石^かの石^か橋^か斗^からんで
大坂^一環^り三^つ年^か傳^へ送^りと
りう^らら^らる^るく
内^の身^を公^を御^し不^ふ審^{しん}くお^のり
石^かり^り

去^りふ^いの^く恐^そ人^にも^見ざる
時^を千^に里^に此^こ遠^と東^にり^同ト
と^この^後さ^らう^ぶ海^の時^を

見^づら^れる^も幸^く遊^ぶ此^こ
あ^らる^まり^と向^くを^恐人^に
あ^ま人^乃と^さら^るあ^るあ^るど
ち^り紀^とあ^らる^も見^{ざる}
時^を子^に里^に此^こ遠^と東^にり^同ト
あ^らひ^と奥^の列^の書^し又
又^あ海^の松^浦海^陸越^え隔^て
遠^し又^この^とさ^らる^る

近身とくく又町七早の向
あふやどをたところあも見
ぶらところあの子里たき記又
同トさ〜にき近の備て
あ〜終の時を平生此付合
根合バ近隣までもつ〜
出入〜ぶら時を千里此き記
成〜ぶら〜も同〜法蔵云

此威の一切のぶ〜
見ぶら時を斯の〜況ん
や悟〜く備つるに於てい
きる遠〜く終〜此新流
あつ〜く〜あ方々
過ちあ来〜く不和とあ
るれば古奇〜
波を長〜日〜〜と

流るるのふゆの中

こそ遠きかりたり

何ぞ都のごとくきざく
人れあ入りし入るるの中よ
いさうりもるあはるる良時
和歌よきる時を又えの
おとく干ぬる事なり
このせん必はゆる時を

あふに種くはるあつら
ま車よ、款味このよ
不毎の根えとぬりてこれ
痛くはるるなり行倭
此人を為干入く支流哉
企つる名所よ車あり
流るる如州利長きいさうりも
送るる身とらあはるる乃

雑説^雑予^予よりく^く永長^{永長}横山^{横山}
山城^{山城}大坂^{大坂}に^に来りて^て所^所直^直
子^子神^神を^をり^りく^くら^らに^に依^依て^て
所^所和^和吹^吹あり^り満^満つ^つる^るところ^{ところ}あり
を^を和^和送^送成^成之^之一^一形^形に^に

去^去程^程り^り
徳川^{徳川}源^源君^君を^を大^大坂^坂西^西丸^丸に^に
入^入所^所なり^り増^増田^田長^長末^末等^等友^友人^人

天^天守^守城^城と^とて^て新^新々^々と^と次^次之^之の^の所^所
内^内書^書清^清日^日の^の利^利家^家々^々住^住居^居の^の所^所
を^を送^送他^他し^して^て廊^廊下^下に^に出^出来^来し^し
た^たら^らば^ばこの^{この}と^ところ^{ころ}より^{より}所^所移^移り^り
所^所り^り依^依見^見より^{より}西^西京^京は^は大^大勢^勢来^来
り^りて^て所^所用^用心^心も^も所^所り^りま^まる^る所^所行^行相^相
市^市正^正内^内々^々と^とあり^りて^て秀^秀頼^頼々^々と^と
も^も所^所福^福ん^んご^ごろ^ろあり^り又^又幸^幸川^川甚^甚

邦法後人等もつてあぐりあ入
して 所機惣代おうううう
く大小と形くともく
家康公此所下知り 所威
先もまた大きなり秀で去り
子の七川前田利長の本必如列
金沢中居候してあり利家も
久く在大坂あり金沢の城番清

も形く大破千及びくりさる
バ利長と増田 去来おがや
城ありとありは色く行の
牌うらとありも形くせんく
城の造代ありあり屋々
堀石垣此修板垣さういお近
大勢の人ありとけく廣太
の夢法ありとあり

旅きひん 野えん昌ざうありす 家う中ちゆうニケま此
者もの古こ教きやう年ねん目め見み一いつあり 故こ家か智ち
ちうぢめめややしし 在ま加か刺しして
日ひ々々出で仕しり 役やく替か加か懸けん或ある心こころの
次つぎ胃いニに胃い等とうとと呼よいいぶぶして
おおびびててぶぶーーままちちあり 結むすま
利り家か日ひ来き福ふく分ぶんあり 事ことのの事こといいささし
つつくくちちううくくそのの上うへ増ます田た長なが来き赤あかお

よりよりののしし 執としてニケまねん
在ま此こゝ地ぢ所しよあり 此こゝのの故こゝ天下てんか
の人ひと口くちあり ちちりりててるるおおささぬ
加か刺し乃の撤てつ善ぜん清せいをを送まかんんありん
とのの風かぜ流ながおおびびててぶぶーーくく大だい坂ばん
ままててももこのの事ことかかくれくれちちううく
あのあの沙さ汰た脱だつり 前まへ田た利り長なが隠かく謀ぼう
れれくりくりててるるちちううく 増ます田た長なが

東 安玉寺等

内府公へ ありし又世に

風吹も 頼りありし遠き

家康中 由不審るんと 拙を

さき 中へ ありしは 是れ 前より

殿中 へ 言討乃 是れ 有るも

まつ へ 利去の 雨ふるるやと

此時 初めて あり 百を へ

風 流る ぬび へ へ へ へ

の へ へ へ へ へ へ へ

は 隔心 へ へ へ へ へ

へ へ へ へ へ へ へ

は 拙め へ へ へ へ へ

内府公より 命 あり 大板 へ

合 へ へ へ へ へ へ へ

ら へ へ へ へ へ へ へ

池清

関ヶ原軍記初篇卷の十七終 油清

油清 関ヶ原軍記初編卷之拾八

目録

- 一 加賀陣御沙汰の事
- 一 并 丹羽長重自玉二下つて加賀の侍
- 一 城窺ふ事
- 一 横山山城守智富天時中戻りの事
- 一 并 徳川 加別出和賸の事

池清

関ヶ原軍記初編巻之拾八

和賀陣 湯抄技の事

并丹羽長重自玉よ下りて加州

の侍と伺がら事

去はりし事

徳川源君を徳大名徳政人哉

大坂物の丸は 百集あられて

屋がて 上意有りけり
此度北州利長が送心乃沙法を
ゆん 呼あつとあるを
孫利長更隠謀成てしに終る
あしこのあしを城警清成始り
とて京中此法士と増し
或ひと役替を糧の政務お頼
ありとのゆきでし利長を

亡父利家より二代お續し
太閤乃忍山のぶし父利家
一生涯在大坂して死後
秀頼の代より常々眼目も
振る心謀之し終るし
利長もその部のごとくあり
屋に都て在るし
千徳部の根りしと極め剣走

城きやう雪せつ法ぽうをしりつをしりて泉いづみと
お集あむむ不ふ経けい明めい年ねんと
泉いづみ康やま近ぢきんむむろろ退たい治ちといへい
と有ありり時ときとと和わ度ど能のう後ごとと福ふく等とう
大だい場じやうののとと夫ふう池いけ田でん三さん大だい番ばんのの尉ゑい加か度ど
左さるる所しよ馬ま田でん甲かう斐ひとと細こ川がわ城じやう
中ちゆうのの淺せん形けい大だい泉いづみとと夫ふう度ど堂だう依い
後ごとと堀ほり尾び徳とく永えい金きん森もり素そ山さん末まつ

一い度どととくくととれれ所しよ在ざいのの所しよとと
加か判はん以い退たい治ちととるる人にんのの子こ君きみととも
入いりり中ちゆうのの事じををいいとと言いふふとともものの所しよ
ををいいとと世せとともも堀ほり布ふととももとともものの所しよ
や加か賀が陣ぢん近ぢきん事じににありりとといいひ
觸ふととももととれれ石いし田でんとともも佐さ和わ山さんとと
ありりととももととれれ石いし田でんとともも佐さ和わ山さんとと
とと極きやくととももととれれ石いし田でんとともも佐さ和わ山さんとと
泉いづみ康やま公こう金きん澤ざいととももととれれ石いし田でんとともも佐さ和わ山さんとと

所進發あるふおめくひ実東
勢敏秀の國は入るる人長
三加依和山城増起して利長と
一たしおぬりうろ老し
お亡るが次べふあうりと云根致
過分に敏前はゆりぬ
家康公初迄まゝ極めぬとも
はしよも未だ以不審よ思

あし丹羽大所左兼つ去まよ
百て是下と利家といお聲也
ふのくまゑん近し城皮
利長運謀の企てまゝ実吾礎
少お分らば長重まゝいそ記
居陣小松は歸りて金澤の
松子とらうらひりあく送ん
と乃極めらんを

家康出るまじくその家先陣と
せしむべしとの由あり給は
に長守と鹿嶋の常におられ
大正平に悦ぶまじく金法
の俸とらうまじく御先陣は
度ふむ子に馳走仕合まじく
急ぎ小松の城に攻りて松子
城伺ひ安否とらうまじく

御を發あるおねの某
御先陣は利長と討果せ
申し人手の掛中を述べ
まじく西産山と所交り
ふし
家康公御機嫌
よく吉光の經刀と長守あそ
下さんらに御まじく御長守
長守に出まじく御別子急

引く小松の城に入り衆人を
あつめて軍に用ゑんと成し
令は乃侍とお伺ひしこれ
よつと加賀陣に奉せし
愾布——らん前田利長此奉
越後く大まきおとめお名
寄るごら奉り那父利家
一生涯秀吉公に仕へく
徹志

勅仕を我々の跡を継いで建
越願す志らんを以初年此秀
相々討ててあるんの子息
あはるりなり又 内府公
秀忠公乃御縁くふれく是
中々親——されば亡父利家
送云少も関東とら入寇
是——とらつたさん

よつこゝ象送んる事とまてて子備
是ちうゝ子の候も只反舌有て
後者此中とまてあり我全く
送んねる旨と申候人とも
へ者これ一夫に候あり出れ
斗りまてわりし事とまて候
うるべし候ももりの事と
の使節とつとありし人との

中より前回家に老臣と申村井
長門守 長九所左衛門 山崎
長つち 奥村伴与右 右田銀
る事 本多安房守等と申
争をの長長とて智彦武
骨との事とありし事と申
ありし事とありし事と申
兵衛せがら財と申事切と

故りて今我りお成るべしと
朽りわがゆくをみ出さく日と
く者一人も争し時り利長
重ゆく横山山城守車志る
屋しとやさるる時く山城守
年二十三才あつりゆりし
人の父山城守の武功干まつて
き万石子石次願し同じ赤老

職あつり志るる干先年病死
して今此山城守赤智とお續
まらるといふもいふはあね
ゆく赤老職あつりし
むこのの時徳人あひりあや
ぶる一太中此は使ひあや
あしと名あといふ利去の
あつく山城守く向は書札

城のつらく大坂へ移り戦
家康公に對して利長のつら
も逆を知るんどの言ふむゆと中
実を和らぐとこのくして歸る
を大にせし使長るれば急戦
入るべくおつらりやまへ
この事ありと有て又軍ありて
自然和議とこのつらり人質ある

沙汰あるべしそのごんき
あるんぢが心算より名ひ斗つて
他略をせんその下知あり
時よ山城守の若年ありその人
ども急帝ありてりりり
の戦場にて討死仕る後を安
る中その御代とてお書身とれ
し後をいりりり大切なる

ととぎんたてやうの山
とに仕換トヤ事ある
まじりまじり人ところあ
清合て水初と退出一速う小
大坂一も立一り実や
此の交年忽たりとそれ人笑
ふとしりとも利長中さう何
徳義年とと免智功の面も

及ぶるゆりゆりと見込
一が果して左のごく之

横山山城を智常中兵衛天晴の

并 徳川家と加洲家と和勝の交

ゆりゆり横山山城を大坂より
その旨とゆりゆりゆりゆり

しつて御討面あぐべし
御出さんく別ち西丸は出仕を
その時他家他人の者く
御流代流をりり殺抜人
此小士之御廊下さ記千おび
しつて無居より志るる
此時山城守 御前はいつ
千披流の安度帯刀あり横山

いまの主人利長此書札を差上
りりより本多依源守との
書札を各次さしりる時
家康公さこの書札を 御手
もも各上玉りて御廊下
みくをねくしつて御前
在玉を其心決さし候えあから
謀略と見くしつて和順の役廊と

さう致さともその書れるんぞ
見べらんやと侍怒りなり
時子いりぬのよそも山詞を
之しきやふもあきか
ふ山城さいかし毛籠西那く
まの主人利長の出札の披見
あききくその後同人の口と
と侍笑拵をされくこそ

師老辨の侍忠意ともいなり
きくふさふ今天下は難
七のまぢくして流人時
と坊らおろし主人中御り
縁老乃好所とさるれく父乃
遣云ふおそむき又秀頼討
して逆意をくまふそ徳人と
一所よりあつく身は地蔵部を

存まや友やど愚昧の利長も
も是等しくはれは披見
おぬしりりる人乃は上を
ゆりしん存まのそん又私
主人の書れ紙投きりぬ事
伎者より者の袖とまるところ
よてゆは者このふんは揚者
面目とくするあも

内府公此内家長の袖を知り
わぶらると同あそゆと中
本多中勢を捕さるるあや
りる内家人の土状を授返
く袖辱とある事
徳川家の長をこのまぢらと
せんや格別ありり
り時山撤す回く去まを

うきよの書状の中にもうき
主人利長は名斗りもあつ
た
内府公の由名もあり
友喜れをおとりの知んで居る
此利もその所直所の由名也
然れば袖辱も由前あつりと
まがうらとともあつても好くあつ
たれむ
泉康公の由名

あつて大ひに旧感あり
いふごとく日るるに能く甲
より衣免大切の使者様お親
むらりのるれを衣免とま
あり先書状様披見せよとて
御下知あり
海老丸を薩中送るに旨
明あり
内府公様御せよ

利長ヶ旅のるゆありせむあり
とて神文をばさし一紙さき
中と 作ちまの時山城やましろちり
けるのま前まへより利家元もと後ごに神文
と書かふ是こゝより今いまさあらうおお書か
る夏なつの庭にわわくは且かつ神文かみより
懐なつかしむる山城やましろをよめて送か
んるにむよとやしむ

内府公うちうらぎの和わ順じゆん内うち別わかんる紀きより
所ところへい之の鬼おにの市いちに利長りぢやうは母はは童どう
若わかき院いん殿でん人ひと質しちよりて大坂おほさか
ありとも雲うみ集あつまりありともか
中ちゆうへいちありとゆふ
内府公うちうらぎのい百ひゃくれん大だいのお御ご機き
かんかんより山城やましろちりち新あらた文ぶん
よそよそそろろけけこころろひひ晴はりり

そのへき別しんちうーいそだ
地帯りく大坂へ来りしうま
やうにやべー南地ゆー陸が
ーく園東へ下向るさー免
中べーそのへき園東小玉
静燈ありと 作せたり
山城きりくーらるるるんが湯
和がくおきんごり利長の母

寺いぞららるるるるるる
別ん形くい急約のどく江戸
あそ 中洲云殿の内姫君の
急く利長の内室よとのゆ約条
よゆゆききひこのよびゆ入巻
らんありゆきく形ひきるるる
らば 内府公を湯別をなき
事お刻色ゆと様うるところあも

あくやうしり実や山嶽
の忠意うきりのありけし
鬼角と 作せられ又さや
あくしりも急くゆき
事形を何条子ゆきま
わく 加別入雲あぐ
と 作せられり志うる
横山をこのしりしり

ふとやうしり網を
及中して海雲の形を
仕るるありと和陸
ありく園東北玉海入魂の根
城をいへ備へ山嶽が
謀骨略しりけるりけし
和陸お海合石のりり
を実東の味亦しり

依く加賀陣の沙汰をおや
り
油漬

関ヶ原軍記初編巻の十八頁
油漬

凡士農工商も夫々の職を家業として持用の器物を
今日と管む其世界一般の法を述べて世写本の巻中小解を白紙
何れ種々の書入又ハ形之覚束なき本偶々感見甚
男女の陰解を画き君臣父子の中や一面を赤め合申
同く是れ是れ第一必竟一時の興衰を記しての戲ま
其職分は道具へ疵付りハ解を著述拙く筆者の偶
何れを只言語とて其遇ちと各々巻中の戲画樂事
池田屋書院は是と歎然然不復得て固て季代りて諸君子所
磨石山人識

和 漢
貸本所
東京牛込細工町
誠光堂
池田屋清吉

